

黄金比からみた女子学生の体型分析と着装評価

○庄山茂子* 青木迪佳* 荒川徹朗* 今岡春樹**

(*長崎県立女短大, **奈良女大生活環境)

【目的】 婦人服サイズの日本工業規格(JIS)表示が、若い世代の体型の大型化に対応すると同時に中高年層へ配慮するために、1997年2月に改正される。身長、ヒップ、バスト、ウエストの表示中心値が大きくなり、さらに新しい体型区分を新設するなどの多様化が図られている。そこで、若い世代の体型の大型化を黄金比という視点から分析し、さらに体型(比例)の違いにより同デザインの衣服の着装イメージがどのように変化するか調査し考察することを目的とした。

【方法】 女子学生 200名を対象に1996年11月に、床から頭頂、臍、自然な形で手を挙げた手先までを計測した。ル・コルビュジェの提唱したモデュロールをもとに身長と臍高の差を分析した。これを1973年計測値と比較し体型変化を考察した。次に同身長で身長と臍高の差が異なる3名を抽出し、同じスーツを着装してもらい、女子学生52名にイメージ評価を実施した。イメージ評価は、25対の形容詞を用いSD法による5段階尺度で評定を求めた。分析は、単純集計、判別分析の手法を用いた。

【結果】 ①本調査結果を1973年と比較すると身長は3.18cm、臍高は2.41cm高い。身長と臍高の差については、0.45cm減少している。つまり差が少ないほど黄金比に近いプロポーションであるため、この20年でわずかに均整のとれたプロポーションに近づいていることになる。②身長と臍高の差は身長を100とすると-0.09～6.36と広範囲にばらつきがみられる。③同身長で身長と臍高の差が異なる3名における、同スーツの着装イメージでは、特に身長の見え方において有意差が認められた。